

令和七年度一般選抜（Ⅰ期）問題 国語

埼玉医科大学短期大学

注意事項

- 一 解答は別紙答案用紙に書くこと。
- 二 解答を書く前に必ず受験番号・氏名を書くこと。

問題用紙四枚

答案用紙一枚

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① すぐに人の言うことを受け入れるのではなく、時間をかけて評価しよう。言い換えると、（１）疑う力を身につけようということ。人を疑うなんて、よくないでしょ。（２）そんなことをしたら、健全なコミュニケーションは生まれないのでは、という反論が返ってきてそうですね。でも、相手の話やSNSで書かれていることを、何でもかんでも受け入れてしまうと、苦しくなりますよね。所詮は他人の考えだから、合わないところもあるはずなのに、それを気にしないほうが不健全ですよ。だから、こう考えませんか。疑うべきは、（①）ではなく、言葉だと。

② （Ａ）、コミュニケーションを通じて、心から信頼を寄せる親友ができたとしましょう。かといって、親友の言葉がすべて正しいかというと、それは違う。だって、あらゆる出来事や事象を知っている人なんていないですからね。たまたま親友が、間違った情報を聞いて、それをあなたに伝えるかもしれない。誤情報というのは、（②）意で流されることよりも、それが正しいと信じている人から発信される場合のほうが、はるかに多いんです。信頼している人の情報でも正しいとは限らない。全部（a）鵜呑みにした後で、それは間違いだとわかったら、「だまされた！」と言って喧嘩になることや、相手を信用できなくなることでありえます。でも、その人が「だますつもりじゃなかった」としたら、どうですか。怒るのはちよつと待て、となりそうですね。だから、言葉や情報を時々疑ってみることは、人間関係を壊すどころか、より健全にすると考えてください。

③ （Ｂ）、なぜ疑う力を養うべきなのでしょう。それは、あなたがフェイクニュースに振り回されないためであり、根拠もなく不安になることを防ぐためです。そして何より、正確な情報を得るためです。世の中は情報の洪水状態です。何が正しくて何が誤りなのかを見分けるのは（b）シナンの業で、正確な事実をつかみ取るのは難しい。でも、疑う力が身につくと、情報の良し悪しを見極める力が高まります。理屈はわかるけど、そんな力が簡単に得られるのだろうかと思うでしょう。確かに簡単じゃありませんが、（３）不可能ではないのです。

④ （Ｃ）、前提として自覚してほしいことがあります。日本人は情報や他人の話を疑うのが苦手だ、ということ。これには、日本独特の文化が影響しているのです。すなわち日本は島国で、同じ価値観を共有しているという意識が高い、いわゆる同一性の文化を（c）ツチカってきました。「（③）をもって貴しとなす」の国ですから、人の話を疑ってかかるなんて、貴い「（③）」を乱す不心得者かもしれません。こういう文化の国で疑う力を養うのは難しい話で、相手に疑問をぶつけるだけでも、嫌われる可能性があります。

⑤ （Ｄ）、日本では相手の話や情報を肯定的に受け止める習慣があり、疑う力の養成を邪魔しているわけです。（中略）誰かが確信を持って話すのを聞いて、たいいてい人は「へえ、そうなのか」とあっさり受け入れる。メディアの情報もSNSも、信じることを前提としている。これが、日本の文化です。そこに（④）を挟むのは、まさに「空気を読まない」行為ですね。

（４）「空気を読むのはやめよう」と訴えている私に言わせれば、笑止（X）ですけど。

⑥ （Ｅ）、多くの人に相手の話や情報を疑う習慣はないので、なかなか厄介です。情報を常に疑って受け止めよう、と（Y）発起すると、これはかなり疲れます。しかも、ますます相手の話が理解できなくなる悪循環です。なぜなら、事実を全部疑ってかかると、何の話を聞いているのかすら、わからなくなりますし、相手は途中で話をやめてしまうでしょう。それが記事なら理解不能となり、読み進められません。だから、何でも疑ってかかるのは、正しい情報収集法とは言えません。

⑦ では、どうすればいいでしょう。ヒントは、あなたが相手の話や情報に接したときの違和感にあります。違和感という言葉は、よく耳にしますよね。じゃあ、違和感って何？と問うと、定義するのは意外に難しくないですか。ぼんやり不快感とか賛成できないことなどをイメージするかもしれませんね。でも、スポーツ選手の体調について、記事で「肩に違和感があるので、治療に専念」と書かれているのを思い起こすと、少しイメージが変わりませんか。こういうときの違和感は、「怪我をしているわけじゃないけど普段と少し違う」状態を指しています。あれ、いつもと違うな。何かひっかかるな、という感覚。スポーツ選手の場合、体の違和感を無視すると、取り返しがつかない（d）ジュウショウになることがあります。だから、彼らは違和感、つま



り無意識に近いひっかかりに敏感です。私がみなさんに持ってほしいのは、スポーツ選手の違和感に近いものです。おかしいな、何となく変だ、という感じ、その感覚です。

8例を挙げてみましょう。 天気予報で、「明日は必ず雪が降りますから、ご注意ください」と気象予報士が言ったとします。これを耳にしたら、たぶんひっかかりを感じるでしょう。なぜなら、未来に起きることは誰にも予想できないのに、予報士が「必ず雪が降る」と(⑤)言いたからです。今日は寒くて、明日は雪雲が日本列島を(e)覆うというのが、降雪を予報する理由です。だから、根拠がないわけではない。雪が降る確率が高いかもしれない。でも、未来のことに「必ず」という(⑥)をつけることはありません。だから、多くの人は「なんで(⑤)言できるの?」とひっかかるわけです。これが、もし「明日は大雪の恐れがあります」だったら違和感持たない。その表現ならば、可能性を語っているとわかるからです。このように、情報を耳にしたり読んだりしたときに「あれ?」と思う一瞬。その違和感を大事にしましょう。

(真山仁『正しいを疑え!』より一部改変)

問一 傍線部(a) (e)の漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字にせよ。

問二 空欄A・B・C・D・Eに入る適語を次より選び、それぞれ記号で答えよ。

ア では イ ます ウ たとえば エ つまり オ でも

問三 空欄①に入る一字の適語を文中より示せ。

問四 空欄②・③・④・⑤に入る漢字一字を答よ。

問五 空欄⑥に入る適語を次より選び、記号で答えなさい。

ア 動詞 イ 助動詞 ウ 形容詞 エ 形容動詞 オ 副詞

問六 空欄X・Yにそれぞれ漢字二字を補い、四字熟語を完成せよ。

問七 隠喩表現を3段落より書き抜け

問八 傍線部(1)「疑う力を身につけよう」とあるが、何故か。最も筆者が重視する理由を本文中より、10字以内で示せ。

問九 傍線部(2)「そんなことをしたら、健全なコミュニケーションは生まれないのでは、という反論が返ってきたそうですね。」とあるが、それに対する筆者の反論を表現している一文をこの段落以外から書き抜き、その最初の3字で示せ。



問十 傍線部 (3) 「不可能ではないのです。」とあるが、何を重視すべきだと筆者は言っているか。文中の3字で示せ。

問十一 傍線部 (4) 「空気を読むのはやめよう」とあるが、なぜか。各自の考える理由を簡単に記せ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

[1] (1) 現代は、歴史学者や未来学者にとって、苦難の時代ではないだろうか。なぜなら、歴史の未来を予測することが、極めて困難な時代になったからである。もとより、未来を予測することは容易ではないが、かつて、「進歩史観」という言葉があったように、歴史は、紆余(A)を経ながらも、(B)的には、ある方向に向かうと考えられていたからである。例えば、「民主主義」という政治体制は、時間はかかっても、世界全体に広がっていくと考えられていた。特に、冷戦終結後は、「民主主義の勝利」が声高に語られ、米国の政治経済学者、フランス・フクヤマは、著書『歴史の終わり』で、最終形態としての民主主義の勝利を語り、社会の(C)的な経済的(a)ハンエイを語った。しかし、現実の歴史を見るならば、ロシアによるウクライナ侵攻が起こり、民主主義の手法であるべき米国でも、虚偽の主張と大衆の扇動を平然と行う政治家によって民主主義の基盤は危機に(b)瀕している。また、世界全体で見るとすれば、専制的政治体制の下に暮らす人々の数は、むしろ増大の一途を辿っている。そして、貧富の差も、人類の歴史始まって以来、最大の格差となり、貧困層の生活は、ますます苦しくなっている。

[2] では、なぜ、現在の人類社会は、これほど、かつての未来予測を裏切る姿を示しているのか。それは、(2)現代の市場や社会や国家というシステムが、極めて高度な「複雑系」になったからである。この「複雑系」という概念は、一九九〇年代にブームとなり、その後、メディアも識者も、あまり使わなくなったが、実は、これからの世界と歴史を考えていくとき、ますます重要になっていく概念である。

[3] では、「複雑系」とは何か。その本質を、人類学者、グレゴリー・ベイトソンは、次の言葉で述べている。「複雑なものには、生命が宿る」。すなわち、市場や社会や国家というシステムが、内部での相互関連性を高め、高度に複雑になっていくと、「創発」や「自己組織化」と呼ばれる性質を強めていくため、あたかも意志を持った生き物のような挙動を示し始めるのである。そして、この「複雑系社会」では、厄介なことに、「バタフライ効果」と呼ばれる現象が(c)頻発するようになる。すなわち、市場や社会や国家というシステムの片隅の小さいゆらぎが、システム全体に巨大な変化をもたらすようになるのである。こうした性質を、筆者は『複雑系の知』という著書において「摂動敏感性」という言葉で述べているが、この性質のため、我々は、現代の市場や社会や国家の未来を予測することができなくなる。なぜなら、どれほど精緻な理論モデルを用いて市場や社会や国家の未来を予測しても、そのシステムの片隅で偶発的に起こる小さな出来事が、その未来を大きく変えてしまうからである。

[4] 「複雑系」の持つ、こうした性質を、ノーベル賞化学者のイリヤ・プリゴジンは、著書『混沌からの秩序』で、「システムの片隅の、小さなゆらぎが、システムの進化の未来を、決定的に変えてしまう」と述べているが、実際、例えば、二〇〇〇年の米国大統領選挙で、(3)フロリダ州の投票方式が「判読不明票」を大量に発生させる酷いもので無ければ、アル・ゴアが勝利し、地球温暖化対策の現状は、かなり異なったものとなっていただろう。また、福島第一原発の非常用電源設備が、海側ではなく山側に設置されていたならば、あの事故は起こらず、世界の原子力政策は、かなり異なったものになっていただろう。

[5] そして、複雑系社会には、「摂動敏感性」に加えて、もう一つ、厄介な性質がある。(X)性とと呼ばれる性質である。すなわち、システムが、あたかも意志を持った生き物のように動くため、人為的に管理し、制御することが極めて難しくなるのである。例えば、(d)キンユウ市場を自由に操作しようとして、リーマン・ショックを引き起こしたキンユウ工学の失敗は、その(D)的な事例である。

[6] では、(4)この生命的システムとしての市場や社会や国家に、どう処していけば良いのか。実は、その方法を見出すことが、(5)地球規模の諸問題に直面する人類にとって、二十一世紀最大のテーマなのであるが、残念ながら、その方法の探求は、ほとんど進んでいない。その(E)的な理由は、欧米の変革論が、基本的に(6)機械的世界観と操作主義に(e)リッキヤクしているからであり、この予測不能・制御不能の生命的システムである複雑系社会に処するには、生命的世界観に基づいた深い叡智が求められるのである。では、その叡智は、どこにあるか。その叡智は、実は、東洋思想の中に眠っている。

(田坂広志『教養を磨く』より一部改変)



